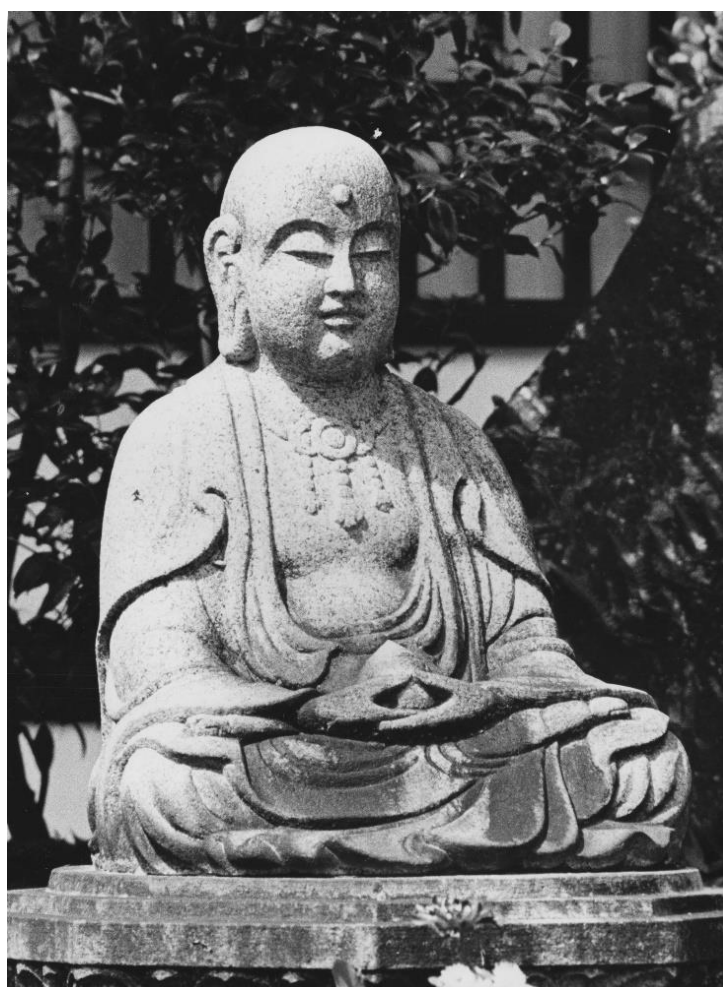


# 石仏あれこれ

## シリーズA 石仏を訪ねる

### A5 散見 1975 以前

森隆一



## A5. 散見 1975 以前

慈眼堂・金昌寺西・西山光照寺跡を訪れる以前にも、数は少ないが、石仏の写真撮ってきた。これらの殆どは引き伸ばししていないので、ベタ焼きをスキャンして得た写真を揚げていくことになる。これは、解像度は落ちるが、写っているものの判定は出来る程度の画質が得られるものもかなりある。ただし、日陰や暗い所撮った写真は、ピントの甘いものも多く、使用に耐え得ないものもかなりある。

ここでは 1975 以前に撮影したものをアルバムの順、すなわちほぼ訪れた順に、眺めていくことにする。

## 真如堂・光明寺 1974

真如堂と光明寺の 2 寺は境内が広く、山門は離れているが、寺域は繋がっている。国宝級の文化財が無いためか、訪れる人少なく。ゆっくり撮影することができる。



左の写真は真如堂と思っていたが光明寺ようである。池のまわりに石材などが置かれている。墓地などの整備のための石材や、石造品などを置いてあると思った。

右は光明寺で、三重塔へ上る道端でみたものである。この手前に、AI章で採り挙げた、五劫思惟阿弥陀仏が置かれている。Google Map に五劫思惟阿弥陀仏が表示されていた。

## 泉涌寺 1975

次の写真は、市電・泉涌寺道から泉涌寺に至る道の脇にある塔頭で見たものと記憶している。

僧侶と思われる人物に 3 人の小さい女の子が配置されている。門内に設置されていることもあり、写真を撮っただけで、由来などは調べなかった。写真から石造では無いかもしれない。



## 妙心寺 1975

妙心寺は寺域が広く、京都の市街地の寺院では最大ではないかと思っている。最も建造時には周りに人家は殆どなかったと思われる。山門の西にある退蔵院と、仏殿・法堂とこの北にある本坊辺りは人が多いが、これらを取り囲むように並んでいる塔頭の土塀の間のやや入り組んだ道は、北門へ抜ける道を除き、人は多くない。ここを歩くのは面白い。

北門から入って南下すると T 字路になる。この右手の塔頭の玄関前に面白い石仏がある。Google Map から、この塔頭の寺号は春光院である。



頭部は頭巾を被っているようである。金昌寺の慈母観音・酒呑み地蔵、真如堂・光明寺五劫思惟阿弥陀仏、上記泉涌寺の像など儀軌を逸脱していると思われる、あるいは茶化したともいえる、‘変り仏’が幾つか見られる。仏教の日本化の一面といえるのではないか。

次の写真は春光院も近くで撮ったものである。鬼瓦などの屋根飾りにも面白いものが多い。背景が空のものは白黒では撮ることが難しい。このころは、石仏よりも屋根飾りや燈籠を撮っていた。振り返ってみれば、大寺院や市街地の寺には石仏は少ない。

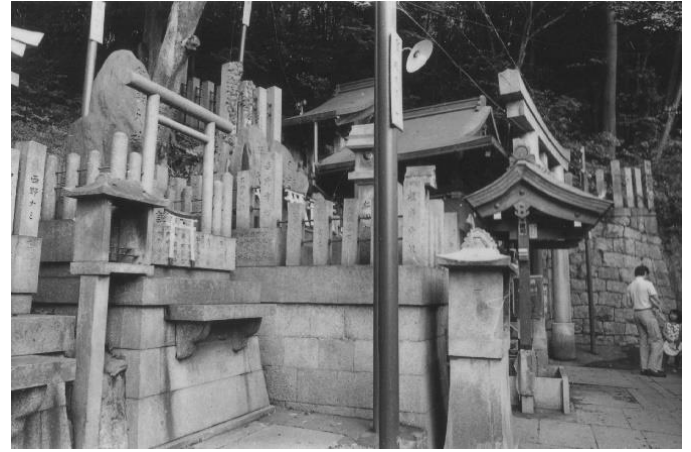


## 伏見稻荷 1975

神社には石仏は無い。下写真は、妙心寺のどこかで撮ったものと思っ  
てきた。アルバムからは伏見稻荷で撮ったと判断せざるを得ない。撮っ  
たのは、本殿を含む地域ではなく、千本鳥居から始まる、裏山の末社巡  
りのコースの途中である。



この他に、次の写真も撮っていた。左は墓標塔群である。右はわから  
ない。



Wikipedia「伏見稻荷大社」から、

平安時代、東寺の造営にあたって鎮守社となるや、真言密教と結び付いてその信仰を拡大、次第に神位を高めて延喜式・名神大社に列し、天慶 5 年(942 年)に正一位の極位を得た。(略)

応仁の乱にてすべて焼亡。乱後、社僧による勧進の下で再建が始まり、明応 8 年(1499 年)に至って遷宮を迎えた。近世まではこれら勧進僧たちが稲荷信仰の普及や稲荷講の結成に大きく関与したという。

明治政府の神仏分離令によって、本願所のほか境内の仏堂がすべて廃寺となる一方、崇敬者による鳥居の奉納や私的なお塚の建立が稲荷山中で顕著化し、現在の伏見稲荷大社を特徴づけるものとなった。

ということで、神宮寺の遺物のうち、墓標を纏めおきしたものと思われる。



## 小諸 1975

清里でのセミナーの後、とにかく小海線の終点小諸に行った。小諸城の周辺で撮ったことしか覚えていない。

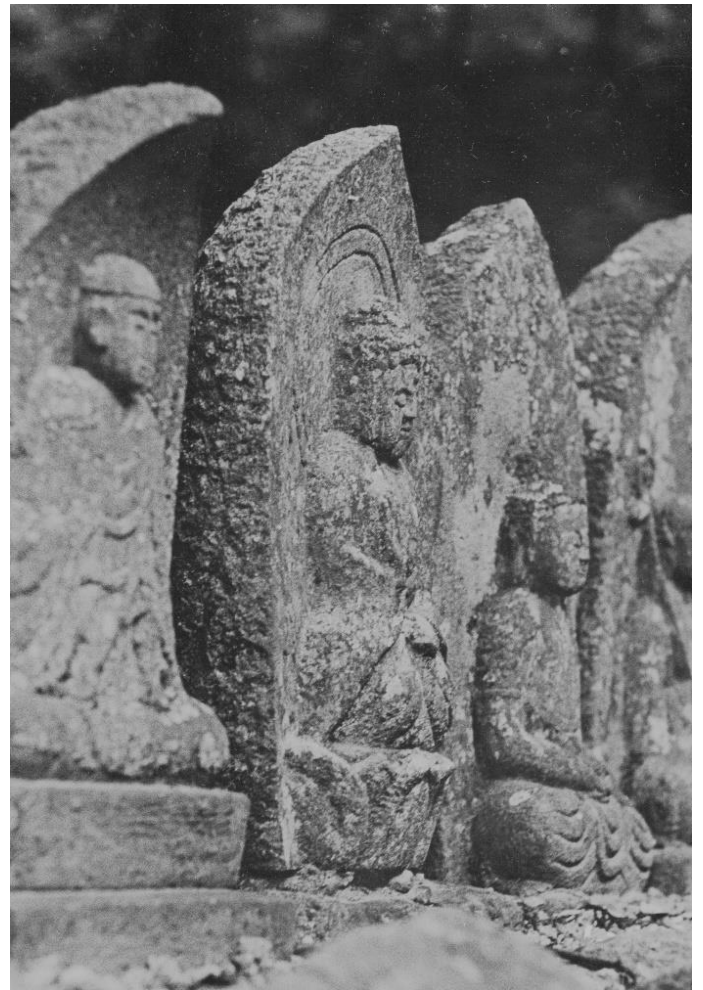


## 室生寺 1975

土門拳の写真展「室生寺」の図録は白黒写真初期の教科書的なもので

あった。近鉄室生口大野でおり、バスで 20-30 分ほどであるが、室生口大野までは京都駅から 2 時間ほどかかる。

次の 2 枚の写真の左は土門拳の写真集にある軍荼利明王である。単体で設置されているのではなく、右の写真のように 10 体ほどの石仏群の 1 体である。もう少し大きな石仏を想像していたので、少しがっかりした記憶がある。

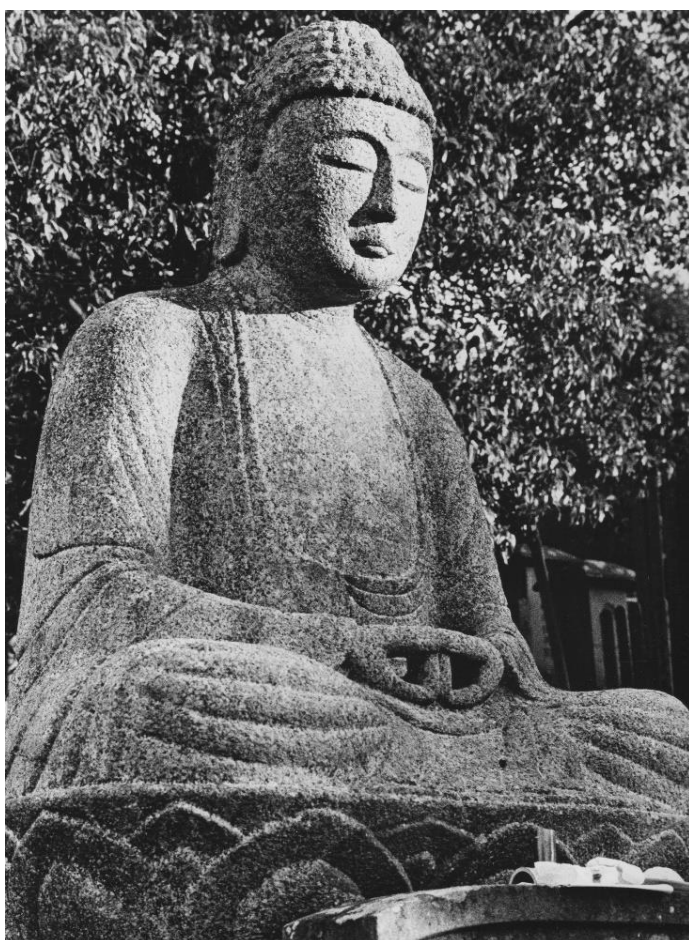


この位置は殆ど日陰になる。

室生寺の写真を現像していて、‘土門拳のような写真は撮ることが出来ない’と思った。この後、入江泰吉・岩宮武二に写真に惹かれるようになった。

## 高尾 神護寺 1975

拇尾・高山寺とともに訪れたが、見つかった石仏はこれのみであった。神護寺で撮ったことは確かであるが、その経緯は全く覚えていない。



## 表紙の写真

表紙の写真に触れておく。

まず、この写真を何時・何処で撮ったのか全く思い出せていない。アルバムの位置からは、志賀駅近くか湖西の何処かのお寺で撮った可能性が高く、時期は1976年の8月の末か9月の初め頃である。ベタ焼き写真の検討が進めば、何か思い出すかもしれない。

また、台座は古そうだが、石仏は、写真を見てわかるように、新しいものである。石屋で完成した石仏をよく見かけるものよりは若干の風化は見られる。新しい石仏は殆ど撮ってこなかったが、他に石仏が見あたらないこともあり、見ているうちに撮ることにした。

本章で取り挙げた高尾 神護寺の石仏も新しいが、表紙のものよりは古いと思われる。

風格が出てくるのにはどの程度の時が必要だろうか。東京都中野区の明治寺が参考になると思っているが、訪れていない。

## あとがき

ここでは、石仏に興味を持つ前に撮ったものである。この頃は石仏よりも石燈籠のほうを多く撮っていた。これは、市街地の寺院や大きな寺院では、墓地は本堂伽藍と区切られていることが多く目につきにくいことによると考える、

一方、郊外型や地方都市の寺院では石仏が見られることが多い。これは、墓地が付属しているかどうかではないかと思う。

Google Map で寺院名をクリックすると、左に寺院の情報や、口コミ評価などが表示される。これによれば、石仏写真のない永観堂や、1枚しかない小比叡・蓮華寺にも幾つかの石仏が見られる。永観堂は、本堂あたりまでしか行ってないので、見逃していたとも思われるが、境内の整備が行われ、石仏も見易く配置されたとも思われる。